

Keiba Global Front Line

競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人をご紹介致します



合田 直弘

3月25日の「グッドフライデー」にマツセルバーク競馬場で行われた開催を皮切りに、今季の英国における芝平地シーズンが開幕した。長かったシーズンオフが終わり、活動期に入った馬や人がたくさぬいる中、このタイミンで現役引退を表明したジョゼフ・オブライエンが、今回のこのコラムの主役である。

彼のこのコラムへの登場は、14年の夏に続いて2度目のことになる。前回は、オーストラリアに騎乗して2度目の英ダービー制覇を果たした直後で、「ダービー9勝のレスター・ヒゴットが2度目のダービーを勝つたのは21歳7か月の時で、21歳と2週間で2度目のダービー制覇を果たしたジョゼフは伝説の名騎手を越えた」とその快挙を称賛。その上で「若き天才ジョゼフの騎乗も、あと何年見られるかわからず、それだけに欧州の競馬ファンはその姿を今、わが目に焼き付けておきたいと願っている」とコラムを結んでいる。

すなわち、周囲の多くの人たちが予測していた通りに事態は推移したわけだが、しかし、これほど早くその時が訪れようとは思っていなかったというのが正直なところだろう。なにしろ、ムチを置く決断を下した時、ジョゼフは22歳と10か月だったのである。

だが、引退のニュースとともに配信された彼の近影は、明らかに面立ちがふつく

らとしており、身長5フィート11インチ（約180センチ）の彼がこの顔つきでは、もはや騎手を続けるのは困難であろうと、誰もが納得をしたのだ。

愛国のリーディングトレーナー、エイダン・オブライエンの長男として生を受け、ジョゼフの騎手デビューは、16歳になつたばかりの09年5月で、翌10年に見習い騎手チャンピオンのタイトルを獲得。デビュー4年目の12年に年間87勝を挙げて自身初となるリーディングの座に就くと、翌13年には126勝という愛国における年間最多勝記録を樹立。まさに破竹の勢いで頂点まで上り詰めたのがジョゼフ・オブライエンである。数を勝つただけでなく、最後のG1制覇となった昨年秋季の愛セントレジャーまで、7シーズンにわたつた騎乗でG1・31勝というのは、欧州随一の大厩舎がバックにしていたとはいえ、尋常ではない中身の濃さと言えよう。

そんなジョゼフに大きなピンチが訪れたのが、昨年春だった。

それまでも、原則として負担重量9ストーン（約57.15キロ）以上のレースにしか乗らないとしていたのがジョゼフである。英国で言えば、ダービーを含めた春の3歳クラシックにおける負担重量が9ストーンで、つまりはこの斤量で乗れないと平地の騎手としてやっていくのは難しいというボーダーラインが9ストーンなのだが、シ

ーズン開幕を目前にしてここまで体重を絞ることが出来ず、しばらくは障害での騎乗に専念すると発表したのが、昨年の春だったのだ。開幕直前に主戦騎手を失ったエイダン・オブライエン厩舎は急遽、ライアン・ムーアと騎乗契約を結ぶことになったのだが、しかし、ジョゼフは5月に入ると戦線に復帰。以降は秋まで継続的に騎乗することになった。

だが、16年のシーズン開幕を前に、再び9ストーンでの騎乗が困難になって、ジョゼフの心は折れてしまったのだろう。

彼が、若干22歳にして騎手生活に切りをつけた背景にあったのが、ホースマシンの第二幕へ向けた準備が、着々と進みつつあったという事実だった。彼は既に、キルケニー郡のピットタウン近郊に拠点を確保。ライセンスさえ取得すれば、管理頭数70頭の「ジョゼフ・オブライエン厩舎」が発足する手筈が整っているのである。

ここ1〜2年は父エイダンに、調整面での進言もしばしば行っていたのがジョゼフだ。天才の名を欲しいままにする父が、彼の助言には熱心に耳を傾け、その内容に全幅の信頼を置いていたと言われている。

新生ジョゼフ・オブライエン厩舎がどんな滑り出しを見せるか、大いに注目されるところである。